

はじめに

チベットの歴史は、古代（5-9世紀）、中世（10-15世紀）、近代（16世紀-1958）、現代（1959-）の四期に大別できる。

古代期の七世紀初頭にチベット初の統一王朝「吐蕃」が、ソンツェン・ガンポ（581年頃-649年）により建国され、ラサを都として、領域を拡大していった。

チベット年代記『王統明示鏡』によると、ソンツェン・ガンポは、13歳で即位すると、チベット文字を制定し、インドやネパールから僧侶を招聘し、仏教を導入したとされる。また、ネパールからブリクティー・デーヴィー（タクリ王国の創始者アンシュ・ヴァルマン王の娘。赤尊公主）を妃に迎え、更に唐の太宗から娘の文成公主を息子グンソン・グンツェン王（在位 641-643）の妃に迎え、インド文化と中国文化を導入させた。更に、十六清浄人法という道徳律、十二位階などの制定も行った。（グンソン・グンツェンの落馬事故死の後、ソンツェン・ガンポは文成公主を自分の妃にしている。）

その縁から、ソンツェン・ガンポは仏教に帰依し、ブリクティー・デーヴィーにはトゥルナン寺、文成公主にはラモチェ寺を建立したとされ、この頃が、チベットへの仏教伝来とされる。

古来、チベットには、ボン教などの土着宗教があり、政治にも関与していたが、吐蕃国が栄えた7-9世紀（ヤルルン王朝）の時代にインドから積極的に仏教を導入した。ヒンドゥー教、イスラム教、ネストリウス派のキリスト教、ゾロアスター教などにも接していたとされるが、ティソン・デツェン（742-797）が王位にあった頃、チベット王室は仏教を選択した。しかし、これによって土着宗教が消滅したのではない。仏教伝来から「後伝期」の始まる約350年間は、仏教と土着宗教は排斥と結合を繰り返すこととなる。

本稿は『チベット密教の萌芽』と題して、チベット仏教史を概観した上で、インド密教の受容について考察する。

チベット仏教史

チベット仏教史は、チベット仏教界の学匠プトゥン（1290-1364）の方式に従えば、「前伝期」と「後伝期」に二分される。

前伝期は、吐蕃建国の頃の仏教伝来から始まる。その経緯については、先に述べた通りである。

ソンツェン・ガンポ以降、8世紀前半に即位したチデックツェン（704-755）の時代に、『金光明経』が将来された。『金光明経』の除災、護国、正法治国の思想は、仏教の理論的根拠を示し、王室や貴族の上層階級に仏教受容の素地を形成するに至った。『金光明経』は、チベット仏教前伝期に大きな影響を与えたといえよう。

次のティソン・デツェン王は、チベットに強固な国家基盤を構築し、中央政権体制を確立した。また、チベット最初の僧院サムイェー寺建立、初めての僧団設置、教典翻訳や史書編纂の着手など、多くの功績を残した。

また、ナーランダ寺の学僧として名高く密教にも造詣の深いシャーンティラクシタを招聘した。その時に随行したパドマサンバヴァは、チベットに密教をもたらしている。

792年から794年にかけて、チベット密教の方向性を決定づける出来事が起こっている。インド仏教代表のカマラシーラと中国仏教代表の摩訶衍の対論である。カマラシーラが勝利し、その後、チベットではインド系

仏教が優勢になったと考えられている。

ティソン・デツェン王以降の半世紀の間で、基本的なサンスクリット文献をほとんど訳し終えている。この頃に編纂された経論目『デンカルマ』には、『大日経』などの密教経典やダラニ等が収められている。しかし、王室は密教の持つ危険性を危惧し、勅許した密教経軌以外の翻訳を禁止した。

この頃、仏教僧による政治介入が目立つようになり、841年、ランダルマ王は、政治から僧侶を一掃するとともに、仏教教団への国家援助を打ち切った（ランダルマ王による破仏）。これは、民衆の指示を得ていなかった王室仏教の壊滅であり、ここに、仏教の前伝期は終焉を迎える。その頃、唐においても「武宋の廃仏」（845）が起こっている。

その後、ランダルマ暗殺などチベットでは内紛が起こり、統一国家体制は崩壊し、かつて王室に保護されていた正統派仏教教団の僧侶は、チベット東部あるいは西部に逃れた。

10世紀に入り、仏教再興を志したランダルマの子孫イエシェーウー王によるインド・ネパールへのリンチェンサンボ（958-1055）ら若い僧21人の留学とアティーシャ（982-1054）のインドからの招聘を行った。アティーシャはその著書『菩提道灯論』で、仏教の修行は、帰依、発菩提心、菩薩律、般若行、密教へと段階を経て行うべきと説き、後世のすべての宗派に影響を与え、チベットにおける正式に密教を受容する上での重要な契機となった。

後伝期は、このアティーシャの入蔵により仏教復興が促されたこの時期に始まるとされる。

また、11世紀初頭、留学僧リンチェンサンボは、無上瑜伽部密教の経論を含め多くの顕密経論を翻訳し、仏教再興のための重要な役割を果たした。

後伝期のチベット仏教は、前伝期のような王室の庇護がもはや期待できなくなった状況から、民衆との直接的接触を深めていく。また、チベット各地に優れた学匠のもと弟子が集まり、多くの教団（宗派）が形成された。この時期、チベット全土を支配する王家が存在しなかったために、教団は各地の氏族と組みし、分裂していった。これら教団を教学から分類すると、四大宗派（サキユ派、カギユ派、ニンマ派、ゲルク派）に大別される。

この分裂状態は、1642年のゲルク派ダライ・ラマ五世による中央チベット制圧まで続いた。その後、ダライ・ラマのゲルク派政権は、強固な教学体系と僧院組織を確立し、内外モンゴルや満州（清朝）までも教圏を拡大し、1959年のダライ・ラマ十四世のインド亡命に到るまで、ダライ・ラマ政権がチベット全域を治めた。

インド密教の受容

チベットに仏教が伝来し一度は根付いた前伝期、インドでは、中期密教が展開され、『蘇悉地経』、『大日経』、『金剛頂経』等の密教経典が次々と成立した。しかし、チベットはこの最新のインド密教を積極的には導入していない。

ティソン・デツェンがシャーンティラクシタを招聘し、その時に随行したパドマサンバヴァがチベットに密教をもたらしたが、王室が積極的に密教を取り入れることはなかったが、密教は土着宗教と結合し民衆の中に浸透していった。王室や貴族階級では、当時のインドで興隆していた無上瑜伽部密教は体制を揺るがしかねないという危険認識があったようである。

ランダルマの破仏以降、後伝期までの約1世紀半の間は、かつて王室に保護されてきた戒律に重点を置いた

仏教は衰退の一途を辿ったが、土着宗教と結合した密教は民衆に信仰され続けた。

このように、チベットにおける密教の萌芽は、「民衆への浸透」という形で、既に「前伝期」にみられたのである。

前伝期の密教は古密教と呼ばれ、その特徴は頓悟禪の影響を受けた比較的単純な修行法を説いている。一方、後伝期の密教は新密教と呼ばれ、チャクラの開発等を伴うヨーガ的要素の濃い修行法を説いている。以下に後伝期の密教について詳述する。

後伝期の初期には、前述のように民衆との繋がりを深めた多くの宗派が形成されたが、密教の優位性を認めながらも顕教や戒律との関係を融合、つまり、律顕密の兼修が達成せず、一旦は顕教化あるいは戒律化の方向に向かうこととなる。

13世紀に入ると、インドではイスラム教徒によるヴィクラマシラー寺破壊(1203)から仏教の消滅、また、元朝によるチベット制圧が起り、外的要因からチベット仏教界は新たな段階に入ることとなる。特に、地方氏族との結託で発展した各派は存続をかけ、新たな治世者となった元朝から信任を獲得に奔走することとなる。各派の中で、サキヤ派が元朝の世宗の信託を得、13世紀後半から元朝滅亡(1368)まで隆盛をみせた。

このような時代にあってもチベット仏教界は、プトゥンにより着実に発展した。プトゥンは、インド大乘仏教導入の完成、チベット大蔵経の編集、タントラ教典分類法の確立等、多大な功績を残した。プトゥンはタントラ教典を所作タントラ、行タントラ、ヨーガ・タントラ、無上ヨーガ・タントラの4種に分類した。この4種の分類は、その後のチベット仏教において採用され続けることとなる。その後、ソナムツェモ(1142-1182)やツォンカパ(1357-1419)等により新たな分類法が示されたが、いずれも分類数の四種を踏襲している。

14世紀の中葉に誕生したツォンカパにより、チベット仏教は独自の教学の完成を見ることとなる。ツォンカパは、顕教と密教を統一させた教学を創り、チベット僧自らがそれを学習できる統一的システムを構築し、更に、ゲルック派を開宗し、幾多の逸材を輩出した。

その後、ゲルック派とカルマ派の対立が起り、ゲルック派のダライ・ラマ五世による中央チベット制圧(1642)まで抗争が続くこととなる。ゲルック派は、チベット全土を征服し、強制的に各派をゲルック派に改宗させ、代々ダライ・ラマが政権と教権の君主となる国家「チベット」が建国された。

その後、中華人民共和国のチベット侵攻によって引き起こされたチベット動乱(1959)までの約300年もの間、ダライ・ラマ政権はチベットの地で君臨することとなる。

おわりに

時の権力により新たに導入された宗教は、その権力の崩壊とともに一旦は表舞台から姿を消す。しかし、真の信仰として民衆の中に浸透し根付いた場合には、幾ばくかの時を経て新たな芽を出す。まさにチベットにおける仏教の受容はその過程を辿ってきたといえよう。

8世紀に生まれ、13世紀初頭にかけて隆盛を極めたインドの後期密教は、その舞台をチベットに替え、1400年に渡るチベットの歴史とともに培われ、今なおチベット仏教として生き続けているのである。今後もその密教の火を灯し続けて欲しいと、密教を学ぶひとりとして切望する。